

小犬の信仰

[マルコによる福音書 7 章 24～30 節]

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことをイエスはそこを立ち去って、ティルスの方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

[1] 「信仰」の反対は「運命」

「信仰」の反対語は何か、と聞かれたら皆さんは何とお答えになるでしょうか。「不信仰」でしょうか。色々言うことが出来るのだろーと思いたいますが、私は「信仰」の反対語は「**運命**」ではないかと思いたいます。「運命」とか「運命的」。よく使う言葉です。「そのように定まっている」と言うことですよ。良い意味で使うこともあります。「運命の人」と出会ったとか。でもどちらかと言うと、否定的なことに使うことが多い気がします。「所詮このような運命だ」とか、諦めをもたらしことに繋がりやすい言葉だと私は思いたいます。

しかし、聖書は、「運命」ではなく「信仰」を語っていると思いたいます。**信仰とは、変化し、前に進む力**なのです。「私はこういう星のもとに生まれた」などとは言わせない力だと思いたいます。それは、**イエス・キリストの愛**が、そのような信仰を私たちの中に生み出して下さるのだと思いたいます。

[2] 異色の物語が伝えたいこと

今日の聖書の箇所は、いくつかの点で異色の聖書の箇所だと言われます。主イエスとの「出会い」の記事なのですから、少し理解困難な所があるのです。それは一つは、ユダヤ人中心の聖書の物語の中でこれは異邦人（外国人）相手の物語であることが異色です。更には、イエス・キリストが癒しの奇跡を起こされ

るのですが、初めイエスはこの異邦の女性に対してつれない態度、愛を感じない言葉遣いをしていることに驚かされるのです。救いを求めて来るこの女性に、「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」とさえ言っています。「あなたたちにパン（恵み）を与える時ではない」ということです。少し後に書かれたマタイ福音書では「わたしはイスラエルの失われた羊のところにしか遣わされていない」(マタイ 15:24)とさえ語られたイエス様の言葉を伝えています。何と排他的に聞こえる言葉でしょうか。腑に落ちません。イエス様はこの世界の創造者が遣わされた「子」であるのなら、民族の壁など超えている筈ではないですか。「愛」は世界を、地球を超える筈ではないですか、あなたの言葉は冷たすぎます、と言いたくなります。

ある人は、これはこの女性の信仰を試したのだろーと言います。そうかもしれませんが。しかし私はそれよりも、ここでこの女性とイエス様とのやり取りの中でイエス様の中にもある変化が起こったのだと見て良いのではないかと思います。いやいや、イエス様は神の子なのだから、永遠の意志を持つ不変の方だと思ってしまうでしょうか。ここで思い出したのは、フォーサイスというイギリスの神学者の『祈りの精神』という優れた書物です。その中で彼は「ねばり強い祈り」という所で、「祈りは、神の意志を変えることは出来ないとしても、神の意向は変えることが出来る」と言っています。驚きの言葉です。しかしその根拠とは、イエスご自身の招きです。「あなたがたはどのようなことでも祈りなさい。そうすれば与えられる。門を叩きなさい。そうすれば開かれる」と。フォーサイスは、祈る者を励ましながら、「敬虔主義的運命論を我々は警戒すべきである」とも言っています。「運命論」です。つまり、「祈った所で何になろうか。神様は私たちのことはご存じなのだからお委ねすればそれでよい。なるようにしかならない」と思うとすれば、それは運命に膝を屈めることに等しいと言っているのです。イエスは、あるがままの私たちの訴え・祈りを待っておられます。

ある説教を読んでいたら、この方は、この時のイエス様は悩んでいた、壁にぶつかっていたのではないかと言うのです。どういうことかと言うと、確かにユダヤ人をまず神はお選びになった、神様の約束の民とされた、これ迄の旧約の歴史はそうだ。しかし、こんな地続きの土地に異邦人も多くいるし、まだ神様のことを聞いたことのない人々は山ほどいる。果たして神の選びとは排他的なものなのかと。7章24節をご覧ください。イエス自らがこの海沿いのティルス地方に足を運ばれているのです。ギリシア人の女性と出会ったように、ここは異邦人も多い場所です。イエス様は、ユダヤから「外」に出て神様の御旨を探っていたのではないのでしょうか。そこで今日の出会いが用意されていたのです。神様のなさることは

不思議です。真剣に自分を求めてくる魂との出会いをイエス様は体験されました。イエス様が、「(わたしの使命はまずはユダヤの失われた者たちなのであり) **まずは子供たちに食べさせねばならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはならない**」と言われたその言葉に、「ああ、そうなのですね、あなたはわたしのことなど眼中にないのですね」と運命的に諦めずに、「**主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます**」と、イエスの内側へと入り込んで行ったこの女性の訴えに、今で言うならば、化学反応が起こった。イエスの中に「これだったのか！ 神の御心は！」という確信・納得が与えられたのではないのでしょうか。ここから聖書全体は、**新しい歴史の展開・局面**を迎えたと言って良いと思います。

[3] 神様はゴミ箱のような方

この女性の訴えは、自分のことではありませんでした。自分の幼い娘が悪霊に取りつかれて親の自分は何も出来ないという重たい悩みを抱えていました。自分以上に娘さんのことが不憫でしょうがない。そこでイエスのことを耳にした。

皆さん、二千年前のことです。医療が未熟な時です。病気になるということは大変なことで、良薬などもなかったでしょうし、そのままか、死を待つような中に置かれるということも多かったと思います。増してや精神を病むと、それこそ悪い霊に取りつかれたと捉えられ、周囲からは差別され、悪霊と言うのですから、神様に見離された者という理解があった訳です。この、**肉体的にも、周囲との交わりの的にも、また宗教的(つまり救いの理解について)にも残酷な仕打ちを受けているこの親子**です。今は、精神の病は決して特殊なことではないということが分かっていますし、良薬もあります。(神様信じている人は薬を服用しないなどという事はありません。神様は全てを働かせて益として下さるお方です)。しかし当時は「病気」になるとは、私たちの想像を超えて絶望的なことだったと思います。更に精神の障害を抱えた子どもの将来を考えると、今も辛いのに、自分がいなくなったらこの子はどうなるのか、不安で一杯だったでしょう。

イエス様は、今、ユダヤとか異邦人とかそんな国境という見えない壁を超えた地平に立っています。そして、そこで、呻く人の訴えを受け止め、そして、救われるのです。

この女性は「まずユダヤ人に」などということを暗示するイエス様の言葉に、「たとえそうであっても、**私たちはテーブルの下のおこぼれに与る小犬のような者かも知れませんが、結構です、そのおこぼれを下さい！ 私たち親子を見離さないで下さい！**」とそのようなことを言ったのです。これは言い換えれば、「**私たちは生きたいのです！ 生かして下さい！**」と、一心に求め続ける切実な思いではないのでしょうか。そして、「**おこぼれ**」は有るのです！ 先週私たちは読みましたね。あの五千人以上の人々にパンと魚を分け与えて、全員が満腹した(全イスラエルと言っても

良い)だけでなく、無駄にならないように余りを数えたら、12 籠に一杯になったということでした。**神の恵みは、救いは、ユダヤを超えて全世界に溢れ流れていく**のです。イエス様は、この女性の中に真実の信仰を見ました。「取るに足らない私、その通りです。でも神の救いは、小犬のような私たち親子にも与えられる筈でしょ。主よ、あなたは私たちの救い主でもありますよね」。そうやって迫って行った。これは、この時のイエス様の心をも動かしました。私たちもそうです。異邦人の「小犬」です。でも恵みのパンを頂いている！ 信仰って綺麗ごとじゃなく、ある意味格闘です。**自分のため、そして誰かのために真剣に祈ることです。**

大門義和牧師という先生は、「**神様はゴミ箱のような方だ**」と言われました。どういう意味でしょうか。「私たちの、人の目には晒すことの出来ないようなゴチャゴチャした思い、苦しみ、孤独、罪…それを全部受け止めるゴミ箱としてイエス様は来て下さったのだ」と。「**十字架**」というのは、私たちのそのゴチャゴチャを一身に背負って下さったお姿。主はゴミ箱になりきる程に私たちを愛し、丸ごと受け入れて下さっているのですね。

信仰とは、このお方に体当たりすることです。「**小犬でもあなたのパン屑は頂きたいのです**」とイエス様に食らい付いていったように、神様・イエス様との「関係」の中に生きてゆきましょう。主はそのために私たちのもとに来て下さったのですから！

お祈り致します。

主よ、私たちに御顔をを向けて下さい。あなたから離れて私たちのまことの幸いはありません。この異邦人の女性のように、またあの創世記のヤコブが、「**私を祝福して下さるまではあなたを離しません**」(創世記 32 章)と、神の使いと組打ちをしたように、あなたに関わり合いながら生きていくことが出来ますように。病む私たち、弱い私たちに、自分の人生を諦めないで前進していく力を上より与えて下さい。主よ、明日手術を迎える〇〇さんと共にいて下さい。このコロナの時代、今人知れず呻いている人を慰め、励まして下さい。そのためにも教会を用いて下さい。主イエス・キリストのお名前によってお乗ります。アーメン。